希望の種
ふくおかNPOファイル
㉖

「人と犬の絆」を育成

九州補助犬協会

事務所＝糸島市▽電話番号＝092－327－0364
メールアドレス＝info@hojo.or.jp

「盲導犬」や「聴導犬」は、ご存じの方は多いでしょう。では「介助犬」はどうでしょう。

日本で60年近い歴史のある盲導犬に比べて、介助犬は15年に満たないほどで知名度もまだまだですが、肢体不自由の身体障害者のため、車椅子の方のつえの代わりとなって立ち上がりを助けたり、冷蔵庫からペットボトルの水を取ってきたり、ドアを開けたりするなど、生活に必要なサポートを行う犬のことです。盲導犬、聴導犬と合わせ、総称して「身体障害者補助犬」と呼ばれています。

NPO法人九州補助犬協会（糸島市）は、この中でも介助犬の育成を中心にしており、厚生労働省に訓練事業所の届け出をして活動しています。任意団体としての設立は2002年。06年に法人化しました。理事長の桜井恭子さん(54)と、副理事長の昭生さん(60)はご夫婦で、共に介助犬の訓練資格をお持ちです。

育成には、長い時間と労力が必要です。期間は全体で約2年半。繁殖に始まり、生後50日を超えた子犬はパピーレイザーと呼ばれるボランティアの方に約1年間預けられ、そこで人間社会の基本的なルールを学びます。その後、適性テストをクリアした犬のみが、訓練に進むことができます。

訓練といっても人間が犬をしつけるのみではなく、介助犬の希望者と、介助犬の候補となった犬がペアで実施していきます。そのため、希望者つまり人間側にも愛情を持った飼育管理ができるかどうかの審査がなされ、お互いの相性も確認が行われます。

医師、獣医師、作業療法士、理学療法士、社会福祉士、介護福祉など、専門的知識を有する多くの方の協力を得て、適切な訓練計画が策定、実施されます。

恭子さんは「介助犬のサービスを人が一方的に受けるのではなく、共に努力して成果を得ることで、ヒューマン・アニマル・ボンド（人と動物の絆）が生まれます。犬は人を支える仕事を楽しみ、人は誰かに頼ることを諦めなくなる。両者はまさに、二人三脚の対等なパートナーなのです」と語ります。

厚生労働省によると、16年7月1日現在、介助犬の実働頭数は全国で71頭、九州では福岡と宮崎の2頭だけです。一方、介助犬を必要としている障害者は多く、ニーズに追いついていない状況と言われています。

大きな理由の一つは、育成コストです。1頭の介助犬育成には300万～500万円が必要ですが、国からの補助金だけではその半分も賄えません。九州補助犬協会では、医療費など支出負担の多い介助犬希望者に無償で貸与するため、足りない分は協会への寄付や会費などで賄っています。

協会を支援する人たちの気持ちに応えるため、14年には認定NPO法人も取得しました。寄付額のうち最大約半分が、確定申告の所得税控除で還付される制度です。

介助犬は、見た目には1人と1匹のパートナーシップ。しかしその背景は、多くの人の温かい思いと協力により支えられています。

（仮認定NPO法人アカツキ代表理事　永田賢介）

車いすに乗る障害者に同伴する県内初の認定介助犬「ロータス」（ラブラドルレトリバーの雄）